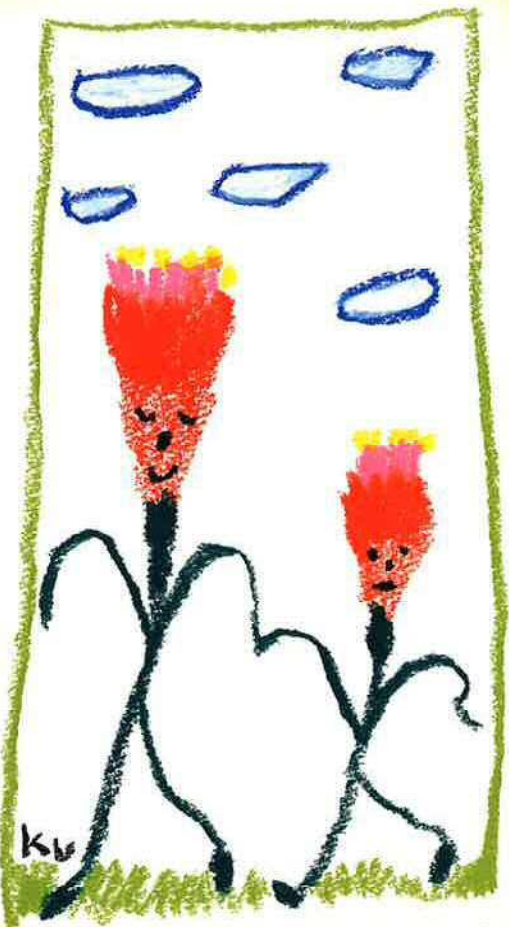


# 第八回

あなたにあいたくて

生まれてきた詩コンクール

—ことばはやさしく、こころはふかく—



平成二十九年 度

# 作品集

装画 黒田 征太郎

## 第8回

# 「あなたにあいたくて生まれてきた詩」

## コンクール

— ことばはやさしく、こころはふかく —

平成 29 年度

## 作品集

### 宗左近

(一九一九〜二〇〇六年)

北九州市戸畑区生まれ。本名 古賀照一。詩人、評論家、仏文学者、翻訳家。

東京大学哲学科卒業。詩集『炎える母』で歴程賞を受賞。晩年には『響灘』など一行詩の作品を発表。また古今東西を超えた美術評論を行い、著書に『日本の美 その夢と祈り』などがある。また翻訳ではエミール・ゾラ、モーパッサン、ロマン・ロラン、アガサ・クリスティーの作品のほか、ロラン・バルト『表徴の帝国』なども手がけた。詩歌文学館賞、チカタ賞、北九州市民文化賞を受賞し、日本現代詩人会から「先達詩人」の顕彰を受けた。



この詩のコンクールは、北九州の生んだ詩人、宗左近さんとみずかみかずよさんの業績を記念して行われるものです。

「あなたにあいたくて生まれてきた詩」は、宗左近さんの編んだ詩集のタイトルから、「ことばはやさしく、こころはふかく」は、みずかみかずよさんのことばからいただきました。

### みずかみかずよ

(一九三五〜一九八八年)

北九州市八幡東区生まれ。詩人、児童文学作家。

幼稚園勤務のかたわら、詩や童話を書き始める。その後、児童文学誌「小さい旗」に参加。その作品は、小学校の国語教科書にも採用され、また児童合唱曲にもなった。詩集「いのち」で第五回丸山豊記念現代詩賞を受賞。代表作に「馬でかければ」「きんのストロー」「こめんねキュービー」など。北九州市民文化賞を受賞。



# 目次

ごあいさつ

1

## 〈小学生の部〉

ゆめじゃない	中村 紗朱	2
言の葉変化	大石 寛子	3
とん すー ぴたっ	金子 朋奈	4
「わたしのお母さん」	野田 実玖	5
木の葉	田中 志穂	6
けんかのきもち	内村 龍吾	7
ぼくの夏	大澤 弘介	8
あさがお	岡村 咲那	9
ずっと 忘れないよ	金子 陽菜	10
むしとり	迫田 日菜子	11
タツノオトシゴ	中野 頼希	12
とのさまばった	松尾 ナディア	13
友達	宮本 涼眺	14
だいすきだんごむし	村上 茅奈	15
ぼくの仲間	村上 理来	16

## 〈中学生の部〉

時刻表	小川 璃光	18
都会	三浦 幹葉	19
偉い人がつくるもの	久崎 彩楓	20
「百のエチュード」	田崎 百夏	21
「八月九日」	有久 優菜	22
「いのち」	井上 寛紀	23
「消えたもの」	上田 彩耶	24
花	川本 滯	25
「まだ誰も知らない」	田尻 芽生	26
中学生	立花 悠	27
シンバルの心情	出口 小晴	28
「九州北部豪雨」	時任 来幸	29
「ひかり」	仲山 杏	30
自分自身	吉坂 理桜奈	31
ぼくはセミ	吉原 里咲	32
講評		34
小学生の部 受賞作品一覧		36
小学生の部 最終候補作品一覧		37
中学生の部 受賞作品一覧		38
中学生の部 最終候補作品一覧		39
選考委員		40

# 「あいさつ」

北九州市長 北橋 健治



「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクールに受賞された小学生、中学生の皆さん、そしてご家族の皆様にご心からお祝いを申し上げます。

このコンクールは、本市出身の詩人 宗左近先生、みずかみかずよ先生を顕彰するとともに、子どもたちの豊かな表現力を伸ばし、未来の詩人や作家が誕生することを願い、平成二十二年度から実施し、今回で八回目を迎えました。

今年度は、北海道や東京都、神奈川県などの県外も含め、市内外から五八二作品ものご応募をいただきました。いずれの作品も大変素晴らしく、選考委員の皆様も選考にはご苦労されたことと思います。

受賞された皆様をはじめ、コンクールに応募された小学生、中学生の皆さんには、これからも「詩」の世界に触れていただき、「詩」の創作を続けていただきたいと思えます。

本市は、今後とも、当コンクールをはじめ「子どもノンフィクション文学賞」、「林芙美子文学賞」など、様々な取組を通して、文化芸術の担い手の育成に取り組むとともに、「文学の街・北九州」の様々な魅力を全国に広く発信してまいります。

結びに、選考に当たり格別のご尽力を賜りました平出先生をはじめ、選考委員、学校関係の皆様、コンクールの開催に当たりご支援をいただきました関係の皆様、厚くお礼申し上げますとともに、小学生、中学生の皆さんの今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

ゆめじやない

北九州市立湯川小学校 一年 中村 紗朱

あるひ、ねこちゃんが

おいでというかおで

みつめてきた

ついていってみたら

ふしぎなことがあった

いつもは、いえがあるのに

かいだんにかわつていて

ねこちゃんが、そこにすわった

わたしもよこにすわった

いつもはみられない

ぴかぴかして

きれいなけしきがみえた

ねこちゃんはまほうつかいなのかな

またあいたいけど

ずっとさがしているけど

ねこちゃんはいない

宗左近賞

最優秀賞

最優秀賞

# みずかみかずよ賞

## 言の葉変化

北九州市立戸畑中央小学校 五年 大石 寛子

楽しいときは  
よくしゃべる  
言葉が声になって  
口からどんどんと  
とびだしていく  
言葉のつぶが集まって  
音符になって  
ひびいてわたる

苦しいときも  
よくしゃべる  
言葉は声にならないで  
心にどんどん  
たまっていく  
言葉のたねが集まって  
涙になって  
こぼれて落ちる

楽しいとき  
口からでてくる  
言葉の音符  
空気を伝い  
人の耳にとどいて  
消えていく

苦しいときに  
心にたまる  
言葉の涙  
しずくにとけて  
服にしみこんで  
消えていく

楽しいときも  
苦しいときも  
ときめくときも  
いら立つときも  
言葉を  
文字で書いてみる  
文字はしつくり  
とどまっている

音符も涙も消えていく  
文字だけがんこに  
いすわっている

## とん すー ぴたっ

北九州市立 中井小学校 二年 金子 朋奈

きょうは土曜日 おしゆう字の日  
 おねえちゃんがならっていたから  
 わたしも一年生からはじめた  
 いっしょうけんめい書いていると  
 わたしの耳に ふでの声が聞こえてくる  
 とん すー ぴたっ  
 新しいお手本を書いてもっていくと  
 先生が つくえのむこうから左手で  
 赤いすみをつけて わたしの右手をうごかす  
 そしたらわたしの手なのに すごい すごい  
 とってもきれいな字が どんどん書けちゃう  
 ハリー・ポッターのまほうみたい  
 とん すー とん すっ  
 「ほら ここは にじがかかったみたいに  
 書くのよ」  
 とん すー ぐくうー ぴたっ  
 「ほら こう書くと ふうせんの中に  
 お水が入っているみたいでしょ」  
 とん すー くっ くっ すとん  
 「そーとーいっばい ちゆういしたいけど  
 なんこまでなら へこたれない？」  
 先生のことばは  
 いつも おもしろくてやさしい  
 だから  
 「あら ともちゃんじょうずに書けたわね」  
 先生がにっこりわらってそう言うとき  
 わたしもにっこり  
 先生 大すき  
 おしゆう字 大すき  
 だから いっばい いっばい がんばって  
 もっともっと じょうずになるんだ  
 先生 みたいにな  
 まほうがつかえるようになれるかな



優秀賞

# 北九州市教育長賞

## 「わたしのお母さん」

北九州市立 大里柳小学校 五年 野田 実玖

わたしのお母さんは  
方向音痴ですぐ道に迷う  
だからわたしは  
道を教えてあげる  
わたしのお母さんは  
よくニコニコしている  
だからわたしは  
ニコニコ笑顔になる  
わたしのほっぺをさわるのが好き  
だからわたしは  
されるがままにさわられる  
わたしのお母さんは  
にのうでがぶにぶにであたかい  
だからわたしは  
お母さんのうでにくっついて歩く  
わたしのお母さんは  
手が器用でアクセサリーを作ってくれる  
だからわたしは  
作ることや細かい作業が好き  
わたしのお母さんは  
やさしい  
だからわたしは  
おこられるとすぐに泣く  
わたしのお母さんは  
すぐ『つかれた』と言う  
だからわたしは  
重たい荷物を持ってあげる  
わたしのお母さんは  
お昼ねが好き  
だからわたしは  
静かにすごす  
わたしのお母さんは  
料理が上手  
だからわたしは  
なんでもたくさん食べる  
わたしのお母さんは  
心が丸い  
だからわたしは  
そういう大人になりたい  
わたしのお母さんは  
いつもたすけてくれる  
いつもわたしの味方になってくれて  
ありがとう  
だからわたしはママが好き

優秀賞

北九州市立文学館長賞

木の葉

北海道池田町立利別小学校 四年 田中 志穂

黄色の葉っぱが

一まい落ちた。

たくさんの

葉っぱの中から

ぬけ出すものは

勇気のある葉。

落ちれば土の

ひりょうになるし、

決して悪くは

ないけども、

あの数の葉から

ぬけて落ちるのは

むずかしい。

その一まいの木の葉は

つるまずに

最期の時を

静かに生きた。

## けんかのきもち

北九州市立若松中央小学校 一年 内村 龍吾

ぼくは、けんかをします。

おとうやおねえちゃんや

ともだちとけんかをします。

おとうとけんかをしたとき、

いつもどちらもうるいです。

でも、おとうとは

おおごえでなくてママにいいつけます。

めんどくさいので

ぼくがたいていあやまります。

こころのなかでは、

「ばか。」とおもっています。

でも、すぐにあそんでいます。

おねえちゃんやけんかしたときは、

ぼくが、おおごえでなきます。

ソファをけとばして

「うるさい。」といわれて

だれもいないところへいきまます。

でも、ひとりほたいいくつなので

またリビングにもどります。

ともだちとけんかしたら

なかなか、なかなかおりできません。

けんかをしたらむかつくけど、

じぶんから「ごめんね。」をいえたら

すっきりして、

やったなというきもちになります。

## ぼくの夏

北九州市立西小倉小学校 四年 大澤 弘介

夏がきた

夏が山にやってきた

夏が海にやってきた

ぼくは、さけんだ

夏だー

夏休みだー

宿題

おばあちゃんの家

すいか

プール

かき氷

飛ぶように毎日がすぎていく

どんどん九月が近付いてくる

海では初めてカニをつかまえた

夜には花火をした

パチパチ

ポーポー

ぼくのにぎっている

せんこう花火が落ちる

しずかにぼつんと

ぼくの夏が終わる

ぼくはじっと地面を見つめた

## あさがお

明治学園小学校 一年 岡村 咲那

がっこうで、たねをまいたらね。

7日ご、

小さな小さなめがポッポッポ。

1カ月たったら、

手のひらくらいになったよ。

そして、私くらいのせになった。

つるが、ぐんぐんどんどんのびて、

なつやすみ、おはながさいたよ。

まいにちまいにちさいたよ。

たねがとれたらね。

らいねんの1年生にプレゼントするんだ。

もっともっと大きくなったら、さきっぱにのぼって、

おつきさまにとどいたら

たのしいのだろうなあ。

ずっと忘れないよ

北九州市立 中井小学校 五年 金子 陽菜

四月の青空にくっきりと 熊本城の天守閣  
でも

くずれた石垣 かたむいたやぐら  
水のないお堀の底には

くずれ落ちてきた石垣の下じきになって  
太い樹が何本も折れ重なって倒れている

あの大地震の夜のことは忘れられない  
北九州にある私の家も ぐらぐらゆれて  
わたしはお母さんにしがみついて  
ただただ ずっと震えていた

あれから一年  
連れてきてもらった熊本城の  
ぼろぼろにくずれた石垣を見ていたら

なんだか：くやしい  
言葉にできなくやしさを感じて

涙が出てきた  
なんでこんなにくやしいらうと思って

ふと お堀の反対側を見ると  
そこには

真っ白なシロツメクサ  
あたりが ぱあっと明るくなるくらいに

はらっぱ一面のシロツメクサが咲いていた  
それはまるで傷ついた熊本城を見守るように

みんまでずっと応援しているからねと  
まるでそんな声が聞こえてくるかのよう

きつと 私を感じたくやしさは  
今の私にはなんにもできないな

という思いなんだ  
でも このくやしさをずっと忘れずにいれば

いつか私も 傷ついた熊本のために  
何かできる時が くるかもしれないな

風にゆれる野原 いっぱいのシロツメクサを  
ながめていたら  
そう思った

## むしとり

北九州市立若松中央小学校 一年 迫田 日菜子

みんながはたけにいくと、

むしたちが、

びっくりしたようにとびはねた。

りょうてをそつとのばして

つかまえようとしたけど

ぴよんぴよんとんでにげていく。

あつちもこつちも

ぴよんぴよんぴよん

ぱつと、ともだちがつかまえた。

すごいな、わたしもってみたい。

じつとしてくれたらいいのに。

じつとしてくれてたらつかまえたのにな。

## タツノオトシゴ

北九州市立 牧山小学校 三年 中野 頼希

タツノオトシゴのオスは  
たまごをうんで子どもをそだてる  
タツノオトシゴのメスは  
子どもをそだてずに  
海の中でブラブラしている  
人間の男の人は  
子どもをうまない  
かわりに女の人は  
子どもをうむ  
そして男の人と女の人が  
なかよく子どもをそだてる  
ぼくがタツノオトシゴだったら  
メスといっしょに  
子どもをそだてたい  
そうすれば子どもが  
あぶなくないようにできるし  
大切にできると思う  
でもぼくはタツノオトシゴには  
なれないから  
大人になって子どもがうまれたら  
みらいのおよめさんといっしょに  
ぼくのかわいい子どもをそだてたい



## どのさまばった

北九州市立若松中央小学校 一年 松尾 ナデア

がっこうのはたけに、ばったがいた。

しましまもようで

からだがとっても大きい。

めは、まるくてまっくらだ。

わたしのことみえてるかな

あしは六ぼん

うしろあしのふたつが

とってもながいし大きいよ。

つかまえようとしたら、

大きなはねをひろげて

ぶーんとおくまでとんでいったよ。

わたしもばったみたいに

とんでみたいとおもったよ。

## 友達

北九州市立 富野小学校 六年 宮本 涼眺

ポロポロ ポロポロ  
涙がこぼれる  
明日のことも考えられない  
五分先も真っ暗やみ

パラパラ パラパラ  
教科書をめくる  
友達といるのは難しい  
どこにも答えはのってない

どうしたらいいのかな  
声をかければいいのかな  
わからない

ベリベリ ベリベリ  
やみがはがれ落ちる  
心がまぶしい

明日が楽しみで  
五分先が楽しみで  
身体は飛んでいきそうだ

ギューと ギューと  
心の手をつないでいれば大丈夫  
必ず答えは見つかる

自分の気持ちを言えなかった  
照れくさくて言えなかった  
言えないまま一緒に過ごしてた

あなたの一声がうれしかった  
ありがとう  
二人の答えを見つけてくれて  
ありがとう  
わたしの大切な友達  
ありがとう

# だいすきだんごむし

北九州市立 田野浦小学校 一年 村上 茅奈

ちよびちよびあるくだんごむし

てにのせるとくすぐつたい

ちよんちよんあるく すぐかわいい

せなかはわたしのおしりと

おなじぐらいつるつる

あかちゃんはおかあさんと

いっしょにあるかないよ

なんでかな

ひとつにかまらないようにね

ちよんとするとくるつとまるくなる

だるまうきがじょうずかな

わたしもいっばいれんしゅうして

できるようになったよ

やっばりかわいいだんごむし

やっばりだいすきだんごむし

## ぼくの仲間

北九州市立 田野浦小学校 五年 村上 理来

ぼくを囲む物たち

めがねはぼくの鼻にのると

ぼくからギョロリと見られて

怖いだろう

くつはぼくから毎日ガシガシ

ふまれて

とてもいたいだろう

消しゴムはぼくが使うと

顔や体がすりすりこすれて

悲しいだろう

ランドセルはぼくにピタッと

くっつけてうれしいだろう

みんなぼくを助けてくれる

いろんな物に囲まれて

ぼくはいつも幸せだ



時刻表

福岡教育大学附属小倉中学校 三年 小川 璃光

千をこえるページの中に  
ただただ  
無表情の数字が整列している  
でもよく見ると  
みんな表情豊かだ

今の時刻をさがしてみ  
下諏訪に普通がとまっている  
山あいの駅でひどいきついている  
僕は応援したくなる  
甲府までがんばって、と

田舎の列車をみてみる  
五時間に一本の列車が走っている  
草原のどまんなかをひたすらに  
僕は行ってみたくなる  
そんなのどかな風景をみに  
都会の列車をみてみる  
大阪から三ノ宮で特急と快速が並んでいる  
どちらも姫路に向かっている  
僕は思う

同じ目標を目指すなんて、友達みたいだな、と  
臨時列車をみてみる  
花火大会に向けて増発している  
もう走った後だけど  
僕は想像する  
乗っている一人一人がああの瞬間を楽しみにしていたん  
だろうな、と

無表情な数字たちだけど  
僕をいろんな場所へ連れて行く  
その場所に立って感じるおもしろさがある  
僕はそれが  
楽しいから  
嬉しいから  
幸せだから  
どんな本より  
これが好き

最優秀賞

宗 左 近 賞

## 都会

福岡教育大学附属小倉中学校 三年 三浦 幹葉

# みずかみかずよ賞

最優秀賞

ビルが立ち並ぶ灰色の街  
静かに信号は青へと変わり  
同じ顔の人々が行き交う  
無数の目があるというのに  
視線は交差しない  
きつと今私が突然消えたとしても  
誰も気づかない 気づけない  
建物のすきまから覗く  
場違いな程青くちっぽけな空  
飛び回る小鳥を見て  
「自由になりたい」なんて君は言う  
君だって飛べないはずなんてないのにね  
そんな簡単なことさえ  
君は気づかない 気づけない  
信号は赤へと変わり  
騒々しく車が動きだす  
突然私は叫び出したくなって  
でも当然声がでるはずなくて  
まるで世界が私を置いて  
ぐるんと一回転したような  
そんな気がして  
自分が世界を構成する一部だ ことに  
私は気づかない 気づけない

優秀賞

## 北九州市長賞

### 偉い人がつくるもの

福岡教育大学附属小倉中学校 一年 久崎 彩楓

弱くなれば切り捨てて  
表の面は平常を装う

YESでもNOでもない  
平行な線を描く

物事の裏側に光が当たるのを恐れては  
光のない所へ潜って  
光をあやつる人たちを  
遠くへ飛ばす

そんなことを飲み込んだら  
本当のことなんて  
きつと誰にも分からない

まともな事がすぐそこにあるのに  
気付かず通りすぎていく

どこかで交わるべきなのに  
永遠に平行線

文句じゃないけど  
寂しいって思えてきた

偉い人たちがつくるのは  
影ばかりで

それが日常になるのが  
少しだけ怖くなった



## 「百のエチュード」

九州国際大学付属中学校 一年 田崎 百夏

フルートの音は私の今を表している  
隠しても、平気なフリしても、お見通し  
私がフルートをふり回しているのではない  
私の気持ちをつフルートが五線譜に乗せてエチュードを完成させる

恋している時

音符はピンク色でハートの形  
うかれていて弾んでいる音色が出る  
「大好き」が響いている  
ニヤケが止まらない、キーも軽やか

ママから怒られている時

音符は噴火しそうな黒と赤でギザギザな形  
突きささってきそう！今、しようと思っただけなのに！何を言っ  
ても伝わらない！ただ大きいだけの音を出す  
「分かってくれない」が負の連鎖を呼ぶ  
私のお気に入り達はママのいらぬものリストにふり分けられる  
噴火は終わらない、キーが壊れそう

何もかもうまくいかない時

音符は絶望のメタルブルーからグレーに変わる。  
フリーズしてしまえそう！私だけ、おいていかれてる感がハンパ  
ない。授業で分かったフリしてたからテストで空白だらけ。考え  
るまでもない原因じゃないです、

「復習」しないのが原因じゃないんです、  
どこから分からなくなっただけが分からない  
カスッカスな音しか出せない  
フルートさえ吹く気がしない、キーが外れそう

ランウェイを歩いている時

音符はにじ色でまんまるいバルーン  
の形  
自信に満ちて、胸を張って、姿勢も正しく！  
ファッションショールとフルート演奏は同じキラキラ  
ウォーキングの一步一步を踏み出す様に  
「楽しい！」が音を響かせる  
キーを押せば音がボンボンボン出てくる

フルートの音は私の心を表している  
人生の音符はまだまだこれからも増えていく

恋、ニヤケ、ママからの怒り、絶望、光、ゼーんぶ、あからさま  
に一小節になっていく  
私の成長をフルートが五線譜に乗せて  
可愛くて、生意気なとんでもないエチュードを完成させる

最優秀賞

# 北九州市立文学館長賞

## 「八月九日」

北九州市立熊西中学校 三年 有久 優菜

八月九日の今日

空は青く澄み渡っている

八月九日のあの日

空は赤く燃え上がった

八月九日の今日

子供たちの笑い声がこだましている

八月九日のあの日

子供たちの泣き叫ぶ声が響いた

八月九日の今日

幸せは今この手の中にある

八月九日のあの日

幸せは全て遠くへと消え去った

貴方には分かりますか？

大切な人を失くした

悲しみが

苦しみが

絶望が

私には分からない…。

大切な人を失くした

悲しみも

苦しみも

絶望も

でも

もしこの手で

苦しんでいる誰かを救うことができたなら…。

八月九日

私は今日を生きている

## 「いのち」

九州国際大学付属中学校 一年 井上 寛紀

この世の全てには名前がある  
 花にも名前がある  
 木にも名前がある  
 虫にも名前がある  
 動物にも名前がある  
 ぼくの名前は親がつけてくれた  
 生まれたときにつけてもらった初めての言葉  
 ぼくは、今、生きています  
 親からつけてもらったぼくの名前  
 ぼくは、今、生きています  
 夏の暑い日  
 ぼくはスコップを手にとつて  
 砂をかきだす  
 一日で風景のかわりはてた村  
 知らない人と一緒に砂をかきだす  
 たくさん泥の中に、柱だけになった家  
 雨で山から流れてきた木、泥、  
 いろいろなもの  
 ここに住んでいた人達  
 どのようにに名前を呼んでいたのだろう  
 雨がたくさん降つた  
 土砂がたくさん流れた  
 家族の名前を呼んだであろう  
 親からもらつたこの名前を  
 先のことはだれにもわからない  
 命は限りがある  
 限られた命をどう使うのか  
 人を助ける  
 人から助けられる  
 困つていたら手伝つてもらおう  
 困つていたら手伝つてもらおう  
 自分とは他人なしでは生きてはいけない  
 生きるというのとはどう違うことだ  
 ぼくはかわりはてた町で教わつた  
 命はかぎられている  
 限られた命なのに人は争う  
 そして人は傷つけ傷つけられる  
 大自然の中で人の命ははかない  
 命は一つしかないのだから  
 大自然の中でかわりはてた町  
 はかない命  
 なぜ人はそれでも争うのか  
 豪雨の中  
 流木の流れる川  
 その中、苦しみを受けた人達、  
 命のはかなさというものを教えてくれた  
 身をもって命とは何かを教えてください  
 みんなひとり、ひとり、一つしか命はないと

# 「消えたもの」

九州国際大学付属中学校 一年 上田 彩耶

死ンダ

近クニ有ル公園ガ死ンダ

シーソー

壊レタ ブランコ

短イスベリダイ

ツマラナイモノノ詰メ合ワセノ公園ガ死ンダ

ソレダケナノニ∴ソレダケナノニ∴

ドウシテダロウ

コンナニ哀シミガ心ニ住ミツイテ回ルノハ

コンナニ淋シサガ心ニ引ツツイテ回ルノハ

ソレハ

友と話した

友とシーソーで遊んだ

駄菓子を食べた

どれだけ〃ツマラナイ〃場所

もう〃存在シナイ〃場所でも

私達のかげがえのない居場所

温かな宝物がつまっていた場所だったから

花

北九州市立熊西中学校 一年 川本 濤

人はいつも花をおくる  
 かんむりを編んであげるとき  
 あやまるとき  
 はなればなれになるとき  
 感謝の気持ちを伝えるとき  
 「おめでとう」と祝うとき  
 がんばりをたたえるとき  
 平和をちかうとき  
 愛を伝えるとき  
 誰かが結ばれたとき  
 誰かの赤ちやんが生まれたとき  
 見送るとき  
 人はいつも花をおくる  
 花をおくるとき  
 喜び、感謝、願い、悲しみ  
 いろんな思いをこめている

人はいつも花をもらう  
 花かんむり  
 仲直り  
 おわかれ  
 感謝  
 お祝い  
 称賛  
 願い  
 プロポーズ  
 結婚  
 誕生  
 お見送り  
 人はいつも花をもらう  
 花をもらったとき  
 幸せ、大好き、ありがとう、約束  
 いろんな気持ちでいっぱいになる  
 花は人と人をつなげてくれる  
 悲しさもうれしさも全部  
 相手の気持ちをつなげてくれる  
 花はわたしたちの  
 渡り鳥のようだ  
 花はわたしたちの  
 郵便屋さんのようだ

## 「まだ誰も知らない」

九州国際大学付属中学校 二年 田尻 芽生

人がいつもいつも言っている  
当たり前

生きている。当たり前

手がある。当たり前

親がいる。当たり前

食べる物がある。当たり前

着る服がある。当たり前

当たり前当たり前

私達は知らない

誰も知らない

当たり前と思っている人は絶対知らない

その当たり前が無い人がいることを

私達は気付かない

誰も気付かない

当たり前と思っている人は絶対気付かない

その当たり前がどれだけ大切かを

私達は分からない

誰も分からない

当たり前と思っている人は絶対分からない

その当たり前が無くなると、どれだけ困るかを

私達は気付かないといけない

皆も気付かないといけない

当たり前と思っている人は絶対気付かないといけない

その当たり前の大切さを

私が見ている景色を見れない人もいる

私が聞いている音を聞けない人もいる

私がおう匂いをおえない人もいる

私を感じる温もりを感じない人もいる

私達の当たり前は決して必ずあるわけではない

当たり前があることが奇跡で

幸せそのものなのだ

だから私達は感謝しないといけない

当たり前がある生活を

当たり前と言える日々を

佳作

## 中学生

北九州市立 曾根中学校 三年 立花 悠

不安だ

不安定だ

心も体も

一人だと寂しくて怖くて

いつもビクビクしてる

一人だと助けてもらえない

けれどいじめにもあわない

反対の気持ちに心にあるのを感じて

言葉がつまる自分が分からない

自分の想いに考えに自信が持てない

子供なのに子供でいられない

ここには魔法も奇跡も永遠もない

未来なんか分からないのに

足下が沼か道か分からないのに進んでる

夢は無いのに夢の中で生きてる

佳作

## シンバルの心情<sup>しんじょう</sup>

指宿市立南指宿中学校 一年 出口 小晴

私はシンバル

だから今日も音を鳴らすの

私はさみしがり屋

だから大きな音を鳴らすの

「ねえ、こっちを見て」

私はシンバル

だから今日も音を鳴らすの

私は気分屋

だから今日はずぶれた音を鳴らすの

「ねえ、もうちよつと気にかけてよ」

私はシンバル

でも今日はちよつと違う

君が私をみがいてくれた

だからとつても素敵な音を鳴らすの

「ありがとう、とつてもうれしいよ」



## 「九州北部豪雨」

福岡教育大学附属小倉中学校 二年 時任 来幸

雨が降った  
それが前兆だった  
号令がかかったかのよう  
好き勝手に暴れた  
一日では終わらない  
悲劇の始まりだった

雨は降り続く  
いつまでも降り続く  
町を 県を 生命を  
荒らしつくしても  
まだ足りない  
追いやめてと願うように  
もうやめてと願うように  
その願いは届かない

沢山の人が亡くなった  
雨に 呑み込まれた  
全ても 命も 何もかも  
豪雨に奪われてしまった  
ただ一つ残るのは  
心に刻まれた  
忌まわしい記憶

それは急に差し込んだ  
一筋の光が差し込んだ  
報道を見た全国の人達  
九州へエールを送ってくれた  
沢山のボランティアや資金  
色々な物が集まった  
九州北部の人達に  
笑顔を届けてくれた

でもまだ安心はできない  
まだ落ち着いていない  
これから先は  
残った傷を  
癒さなければならぬ  
ボランティアと協力して  
復興を目指して歩く

今も続く  
雨は続く  
警報も 注意報も 避難勧告も  
今なお発令されている  
繰り返されるテロップに  
不安は募るばかり  
不安が消えるのはいつになるのか

この出来事が  
今後語り継がれる時  
来るまで  
忌まわしい記憶を  
残しておいてほしい  
どんな経験も  
役立つときがくるのだから

「ひかり」

九州国際大学付属中学校 二年 仲山 杏

あさ

カーテンから

入ってくる ひかりで

目をさます

さつきまで なにか

あたたかいものを

見ていた

戻りたくても

戻れない

もう一度 みたくても

みれない

そんな世界で

うまれた たくさんのものたち

今日も ひかりに

照らされている

よる

まどのむこうの

かすかな ひかり

一瞬

なにかが

ひかりが

横切ったような

気がした

## 自分自身

北九州市立熊西中学校 一年 吉坂 理桜奈

いつもうるさく感じていたせみのなき声が小さくなっている気がする。

だれにでも時間を戻して戻りたい時間があるのではないか。

時間を前に戻してタイムスリップ出来るとするなら、いったいどこに私は戻りたいだろう。

きっと戻りたい場所があると思う。

何度も繰り返し返し季節が通り過ぎていつてもたどり着くことが出来ない場所がある。同じ日々を繰り返し送っていても、たどり着くことの出来ない場所がある。

もしあの時へ時間を戻せたら…と思うけど。

時間を前に戻せたとしても、結局は自分自身と向かい合わなくては、意味がない。

時間を戻して、自分の失敗とあやまちを正しく修正しようとしても、それで自分が幸せになれるとは言えない。きっとまたどこかであやまちをおかすだろう。

昨日とは違う今日、少しでも自分に勇気をもつたら、それは昨日の自分よりも少し強くなれるような気がする。

# ぼくはセミ

北九州市立熊西中学校 三年 吉原 里咲

ぼくはセミ  
今日 やつと成虫になった  
よし がんばるぞ

でもぼくは  
一週間しか生きられない

ぼくはセミ

何年も、何十年も生きることが  
できるから

よく人間はこう言う

「また今度すればいいや」と。

今度っていつだろう。

あれとも来週？再来週？

先延ばしにしていると、

ぼくたちはあつという間に死んでしまう

だからぼくは、今を必死に生きる

ほんの少ししか生きられないけど

人間の少しの間  
人間に負けないくらい必死に生きてやる

ぼくはセミ

ぼくが生きていられるのも 今日で最後だ

今日でもう死ぬんだ 人間がうらやましい

やっぱりぼくは 人間ができるから

まだまだ 生きることができて

ぼくは どれだけ生きたくても

一週間しか生きられない

でも人間は まだまだ未来があつて

まだまだ喜びや悲しみを感じる事ができて

まだまだ努力する事ができて

いろいろなことを経験する事ができるんだ

うらやましいな

ぼくはセミ

ぼくは人間がうらやましい

だけどぼくは

人間に負けないくらい一生懸命生きたんだ

人間にとつてはたかが一週間でも

ぼくににとってはかけがえのない一週間だったんだ

だから人間には

だか一日でも

精いっぱい生きてほしい

「生きる」って素晴らしいことだから

ぼくはセミ

ぼくは一週間しか生きられなかった

それでも

一日一日を一生懸命に、生きた



## 平出 隆

中村紗朱さんの「ゆめじゃない」という詩に、とても注目させられました。どうしてこんな詩が書けたんだらう、という目で、くり返し読むことになりました。

結論からいいますと、この詩は、とても純粋な眼と心でなければ受けとめることのできない場所を見つけている。そんな素晴らしい詩です。とくにいいのは、「ふしぎなこと」をしっかりと観察しようとしているところです。普通は、「ふしぎなこと」を「夢」として語って終りにしてしまいます。ところが、紗朱さんは、「ゆめじゃない」と断言します。そうして、なにが起ったか、なにが現れたか、その現れたものと一緒にいて、「いつもは見られない」なにが見えたか、をしっかりと記録したのです。しかも、「またあいたいけど／ずっとさがしているけど／ねこちゃんはいない」という最後の三行で、できごとを終りにせず、いなくなったものをさえ、見つづけていこうとしています。「夢の場所」と「夢じゃない場所」との両方が、しっかりと見つめられている。こんなことができるのは、純粋な心の状態としっかりとした眼によるものです。

これまで、二つの大賞の性格づけとして、次のように大まかに考えてきました。「身近で親しい場所に見出した詩」はみずかみかずよ賞、「宇宙的な遠いところまで届くような詩」は宗左近賞、というふうに。ところで、紗朱さんの詩は、一読すると「身近で親しい場所」で起った出来事を書いたもののように思えます。しかし、これはとても大きな広がりをも、しっかりと感じさせるものです。そこで、思いきって、宗左近賞のほうに選んだのです。

みずかみかずよ賞は大石寛子さんの「言の葉変化」で、大きなテーマを「身近で親しい場所に見出した詩」といえるでしょう。「言葉」と自分との関係について、日頃からよく観察している人ならではの作品です。この捕まえにくいものを「変化」としてとらえ、「変化」を、それとは反対の、「文字」の「がんこな」性質に見出しているところが優れています。

中学生の部の三浦幹葉さんの「都会」は、都会の雑踏の中にいて、世界と自分との関係に突然、身体全体が目覚め、反応します。「まるで世界が私を置いて／ぐるんと一回転したような」感覚は、身近で親しい場所に大きなものが訪れた「詩」の瞬間でしょう。小川璃光さんの「時刻表」は、数字だけでできているような「本」に、遠いはずの世界の情景を次々と見出していきます。

遠くへ連れて行く詩の力、近くを発見する詩の力、その両方を、今年も読むことができました。

## 平 出 隆



© Takashi Mochizuki / ©望月 季

北九州市門司区生まれ。  
詩人・作家・多摩美術大  
学芸術学科教授。装幀家、

造本家としても知られる。

一橋大学在学中より詩と詩論を発表しデビュー。1974年に仲間とともに版元・書紀書林を構え、翌年、詩誌「書紀」を発刊。70年代の詩的ラディカリズムの先端を担う活動を展開。詩集『胡桃の戦意のために』で芸術選奨文部大臣新人賞、散文作品集『左手日記例言』で読売文学賞、散文集『ベルリンの瞬間』で紀行文学大賞、評伝『伊良子清白』で芸術選奨文部大臣賞、藤村記念歷程賞など受賞多数。また木山捷平文学賞を受賞した小説『猫の客』が2014年、世界的ベストセラーとなった。

# 小学生の部

## 受賞作品一覽

最優秀賞 宗 左近賞	ゆめじやない	なかむら	中村紗朱	湯川小学校 一年
最優秀賞 みずかみかずよ賞	言の葉変化	おおいし	大石寛子	戸畑中央小学校 五年
優秀賞 北九州市長賞	とんすーぴたっ	かねこ	金子朋奈	中井小学校 二年
優秀賞 北九州市教育長賞	「わたしのお母さん」	のた	野田実玖	大里柳小学校 五年
優秀賞 北九州市文学館長賞	木の葉	たなか	田中志穂	北海道池田町立 利別小学校四年
住 作	けんかのきもち	うちむら	内村龍吾	若松中央小学校 一年
	ぼくの夏	おおさわ	大澤弘介	西小倉小学校 四年
	あさがお	おかむら	岡村咲那	明治学園小学校 一年
	ずっと忘れないよ	かねこ	金子陽菜	中井小学校 五年
	むしとり	さこだ	迫田日菜子	若松中央小学校 一年
	タツノオトシゴ	なかの	中野頼希	牧山小学校 三年
	とのさまばった	まつお	松尾ナディア	若松中央小学校 一年
	友達	みやもと	宮本涼眺	富野小学校 六年
	だいすきだんごむし	むらかみ	村上茅奈	田野浦小学校 一年
	ぼくの仲間	むらかみ	村上理来	田野浦小学校 五年



最終候補作品一覧

三百円のおやつ	後藤 総汰	西小倉小学校 二年
変わらない・変えられない	飛松 恋綺	福岡教育大学附属 小倉小学校六年
あかり	渕本 泰地	宗像市立白田ヶ丘 小学校四年
いのち	森若 春乃	牧山小学校 一年
未来へ	柳井 のどか	大里柳小学校 六年
私はおねえちゃん	山田 千華	花尾小学校 二年

小学生の部 応募総数 43点

# 中学生の部

## 受賞作品一覧

最優秀賞 宗 左近賞 時刻表

小川 璃光  
福岡教育大学附属  
小倉中学校三年

最優秀賞 三浦 幹葉

三浦 幹葉  
福岡教育大学附属  
小倉中学校三年

優秀賞 都会

久崎 彩楓  
福岡教育大学附属  
小倉中学校一年

優秀賞 偉い人がつくるもの

田崎 百夏  
九州国際大学付属  
中学校一年

優秀賞 「百のエチュード」

ありひさ 優菜  
熊西中学校  
三年

九州市立文学館長賞 「八月九日」

井上 寛紀  
九州国際大学付属  
中学校一年

「消えたもの」

上田 彩耶  
九州国際大学付属  
中学校一年

花

川本 澪  
熊西中学校  
一年

「まだ誰も知らない」

田尻 芽生  
九州国際大学付属  
中学校二年

中学生

立花 悠  
曾根中学校  
三年

シンバルの心情

出口 小晴  
鹿児島県指宿市立  
南指宿中学校一年

「九州北部豪雨」

時任 来幸  
福岡教育大学附属  
小倉中学校二年

「ひかり」

仲山 杏  
九州国際大学付属  
中学校二年

自分自身

吉坂 理桜奈  
熊西中学校  
一年

ぼくはセミ

吉原 里咲  
熊西中学校  
三年

## 学校賞

北九州市立 曾根中学校

福岡教育大学附属小倉中学校

最終候補作品一覧

感謝

一ノ瀬 賀子  
熊西中学校 三年

夢

上部 聡恵  
熊西中学校 三年

必死に逃げろ！

下崎 美桜  
九州国際大学付属 中学校二年

贈り物

津野 朱音  
熊西中学校 一年

何のために産まれてきた

濱口 桃子  
九州国際大学付属 中学校一年

未来への道

原 彩乃  
九州国際大学付属 中学校一年

十五歳の自分

山下 萌加  
吉田中学校 三年

中学生の部 応募総数539点

選考委員

最終選考委員

平出 隆

二次選考委員

原田 暎子  
鷹取美保子  
山田まゆみ  
篠崎 政義  
大川内英樹

一次選考委員

原田 暎子  
鷹取美保子  
山田まゆみ

## 第八回

「あなたにあいたくて  
生まれてきた詩」

コンクール

—ことばはやせしく、こころはふかく—

平成二十九年 度

## 作品集

二〇一八年二月二十八日発行

編集・発行

北九州市立文学館

〒八〇三-〇八三三

北九州市小倉北区城内四番一号

TEL 〇九三-五七一-二五〇五

FAX 〇九三-五七一-二五二五

印刷・製本 エポック(株)

※本書掲載の記事及び写真の  
無断転載・複製を禁じます。



Kitakyushu  
Literature Museum